

ナゲの挿木、とり木、実生等に専念して、同好の仲間や、新しい仲間に分け与えたいと思うこの頃である。

「参考文献等」

世界のシャクナゲ 吉岡久治著

雲南のシャクナゲ 日中共同出版

シャクナゲ (その種類と栽培) ガーデンライフ社

趣味の山草 北海道山草趣味の会編

北海道の山野草 北海道山草趣味の会編

シャクナゲとツツジ 東京山草会監修

実生への誘い (VI)

有珠郡大滝村 大 宮 不二雄

ウチヨウラン

ウチヨウランの和名は「羽蝶蘭」からきたもので、羽を広げたチョウに見たてたことである。

分布は、北は青森県から南の鹿児島県大隅半島南端で、北海道には分布しない。

自生地は谷川沿いのそそり立つ絶壁の割れ目や窪みにイワヒバ等と混生している。

ウチヨウランは産地によって草姿や花形、色彩に豊富な変化をもち、一輪一輪に溢れるばかりの魅力があり、小型野生ランの最高人気種である。

花期は5月下旬頃から7月下旬であるが、青森産が一番早く、南下するにしたがって少しずつ花期が遅いようである。

草丈は10~20cmくらいで、細い葉が3~5枚でゆるやかに湾曲し、地中浅くに楕円球で長さ1~3cmの地下球があるが、栽培状態によってかなり差がある。

栽培に使用する鉢はなるべく小さめの方が良く、直径9cm前後の素焼鉢が良いが、植え込む球数によって使い分けると良い。

用土は清潔なあらめの用土で、私は黒玉土と樽前砂、火山砂の等量混合土を使用しているが、要は水もちの良い用土は避けた方が良い。

植え替えは、10月下旬~11月に入ると地上部が黄変しやがて茎葉が枯れ始め、指で触れただけで離脱するようになるので、この頃より翌春の発芽期までの間ならいつでも良いが、止むを得ず発芽後に植え替える時は、新芽を折らないように細心の注意が必要である。何故なら、発芽は1度限りで再生不能だからである。

植え付けるには、先ず1cm大の礫を鉢底に2~3列ならべてから用土を灌水しても流れない程度に入れ、腰水法で十分に吸水させる。吸水が終わったら水を切り、用土に穴をあけてピンセットなどで球根を植え付ける。球根の深さは芽先が隠れる程度とし、深植えは避けることである。深植えにすると、発芽後に基部が過湿となり腐る原因になる。

置き場は、風通しが良く、雨が当たらな

いで午前中の陽が十分に当たり、午後からの強い陽差しを遮る所が理想的である。私は、冬の防寒用に作設した玄関フード内で栽培している。真夏の高温期といっても本州地方とは違うので、玄関戸を左右半開にする事によって室温と風の流れを計れるので育成上の支障はない。欠点と云えるのは、開口部に近いほど用土の乾燥が早い事と陽光が均一に当たらないことぐらいであるが、風雨の毎に心配しなければならないなどの屋外栽培に比べると問題外である。

灌水は、用土の表面が乾き切ってから、鉢底から流れるくらい十分灌水する。過湿にすると球根と茎のつけ根が腐り易くなる。ウチョウランは他の植物のように痛み始めの兆候が現れず、変だと気付いた時にはすでに手遅れ状態である事が多く、灌水には特に注意をしていただきたい。

肥料はあまり必要としないが、マグアンプKを少量置肥したり、薄い水肥を月2～3度与える。私は、規定の割合より更に2～3倍に薄めた水肥を用意し、本葉展開後から灌水として与えている。

害虫については、室内なので葉ダニが発生するためスミソンを2回ほど散布している。

冬の管理は鉢のままで越冬させるので、10月下旬～11月頃に葉が枯れた後は水を控え、用土が乾燥状態のまま保管している。

少々の凍結には強いが、やはり凍害が心配なので無暖房でも氷点下にならない場所で保管の方が良い。室温が高いと、用土が乾燥状態でも2～3月の雪溶け前に発芽する事もあり、以後の管理に思わぬ苦勞を

強いられる時もあるが、発芽した場合は出来る限り日の当たる場所に移し、夜間の冷え込みで新芽を凍結させないように育てることである。

実生は、用土中全体にラン菌が繁殖している事によってウチョウラン種子の発芽率を高めると考えられているので、結実期までにはこの条件に合う播種床を用意しなければならない。一般的には、シユンランなどのように根が太く長いものを表土に見え隠れする程度の深さに根を広げて植えておき、完熟した種子をこの根周辺に採り播きする。発芽は翌春となる。

植え替えは、実生苗を2年目に移植する以外は2～3年そのままに栽培する方が気嫌が良いようである。私は、同一鉢で何年経ったから植え替えるという感覚ではなく、分球により混み過ぎ解消のために植え替えているのが現状であるが、その為に作落したことはないので、5年は大丈夫と考えている。

自生地のウチョウランはイワヒバと混生している事が多いために、イワヒバで栽培するのが良いように思い勝であるが、これは止めた方が良い。

その理由は、イワヒバを生々と育てるには水切れが禁物であり、その結果ウチョウランには過湿状態となる。また、イワヒバの根塊の中にはいつとはなくホコリや土が溜り、更に水排けが悪くなるばかりである。それでも、初めの1～2年は何とか生育するが、その後は分球どころか急激に数を減し、遂には元も子も無くすることもある。

植え替えるには、イワヒバの根をバラバ

ラに崩さないとウチョウランの地下球を取り出せないなどの欠点もあり、いずれにしても、イワヒバでウチョウランを栽培するのはお勧めできないが、どうしてもイワヒバ植の風情を楽しみたい方は、イワヒバを枯らしても良いつもりで水管理をして欲しい。

ウチョウランの近似種に、千葉県特産種で千葉県の旧国名「安房国」にちなんで名付けられた「アワチドリ」がある。自生地は房総半島南部に限られ、この地以外には分布しない。

このアワチドリの分布域の真ん中で、造花の神のいたずらか手違いとも思えるウチョウランの自生地が発見された。ウチョウランに似たアワチドリでなく、ウチョウランそのものであることから、採集地である通称「頑固山」の名を冠して、採集者の吉

田一治氏により「ガンコラン」と名付けられた。

私も、吉田一治氏よりアワチドリと一緒にいただいたので大切に栽培しているが、草姿は他産地に比べるとガンコに見えるが、花色は淡い紫紅色で優しい顔をしている。ところが性格はガンコ者らしく、他産地のものよりも細かに世話をしているにも拘らず、その気持ちに応じてくれない。他のウチョウランは1年に1~2球は植えてくれるのに、このガンコランだけは古球が新球に代るだけである。

これでは何時まで経っても嫁に出せる娘を育てることが出来ないので、今年こそは何としても口説き落とそうと策を練っているが、このガンコ者とのつき合いを毎年楽しみにしている自分は、はたして素直なのかガンコなのかと自問している昨今である。

イワハゼ



オロフレにて